

遣り水文化の日本



東京工業大学教授 中村 良夫

人のこころとは不思議なもので無念無想のうちに時を過すということは出来ないものらしい。

よほどの高僧ならいざ知らず、われわれ凡人の頭のなかはとりとめもない雑念がとめどもなく湧いては消え、消えては湧き、川の水が滔々と渦まきながら流れ去るように、頭のなかをよぎってゆく。

一日の仕事を終えて、そろそろ寝に就こうかと筆を置いて放心しているようなとき、寝るには少し早く、更けゆく夜をしばし楽しむようにうつらうつらと眠るでもなく、覚めるでもなく、呆然としているようなとき、頭のなかは例によって、あらゆる意味や目的から解放された、それゆえに心地よい影像が逃げ水のたわむれのように流れてゆく。

それはたしかに水の流れに似ている。いや、こんなとき人の見る光景はまさしく川の流れそのものかもしれない。どこからともなく瀬音が聞こえ、水底の砂つづがきらきりと光っているではないか。

どこかで見た流れなのだろうか。幼いとき日がな一日走りまわった野原の小川なのか。それとも旅先のつれづれにぶらついた古い家並に添い流れる細い水なのか、そうかも知れない。

私は、今日、出張先の京都でふっと想いついて鴨川を遡り、蝉しぐれの上賀茂と下鴨の神社を訪れてみた。

そこで見た美しい二筋の流れがいま夢のように眼前に立ち現れてくる。

上賀茂の山かげから湧き出た御手洗川が橋殿や舞殿の下をかいぐって明るい芝生の方へでたかと思えばふたたび木下闇を縫うように消えてゆく。その清らかな水のゆらぎが境内の北東の隅から南東の方向へ斜めに横ぎってゆく独特の地相。このもの古びた境内のたゞずまいはたしかに遠い昔の日本のほいがする。

古い絵巻物の画面をよぎっていた美しい小川。平安貴族の寝殿を彩るあの雅びた流れはこんな姿ではなかったか。また「作庭記」のなかで、「岸边のおもてをうすうなして・・・」と、濃やかに指図された遣り水とはこんな風情ではなかったろうか。

上賀茂の流れは神社の境内を抜けた先がまたおもしろい。堰で分流され、水位の安定した流れは社家と呼ばれる神官の住まいの連なる道筋を浅い疏水となって流れてゆ

く。社家はめいめいの屋敷のなかへ細い流れを分け入れて、庭のなかに遣り水をしつらえ、それを門あたりでふたたび疏水へ還流させる。

その昔社家の神官は神事に先だち神域から下ってきたこの庭先の流れで体を清める慣しであったと言う。

どこの屋敷もこの清らかな遣り水の岸边にささやかなお庭をとゝのえて、訪れる人の眼を楽しませてくれる。遣り水へ下りる小さな石段が植込みの茂みに見えた。

下鴨神社の遣り水はもっと手が込んでいる。

流れはどこから来るのか知らないが、上賀茂の御手洗川と同じように境内の北東隅から入って表参道の通る糺の森の南東隅へ抜けてゆく。ところが本殿のある瑞垣の内は川の水をそのまま引くのではなく、疏水状に分流した水をめぐらせ、それをふたたび本川に還流させる仕組みになっている。

しかも疏水のとり入れ口の構えがすばらしい。本川を視界の奥へ秘するように置かれた小さな社のまわりから、こんこんと水が湧き出るようなしつらいだ。この心にくい演出のおかげで不安定な本流から切り離された水は、神さびた静謐と精気を帯びるのである。

遣り水で想い出すことがいろいろある。

京の二条あたり、ちょうど頼山陽の山紫水明処の少し下流の鴨川から、分派して高瀬川となった水が美しい遣り水となって料亭のお庭の中を流れるところがある。高瀬川疏通の功績者、角倉了以の屋敷跡と伝えられているこの庭は夜がよい。木かげから洩れてくる茶屋の灯影が、ほの暗い水辺にきらきりと散る。遣り水のある結構なお屋敷とはこのようであったかと訪れる人はみなすゞるに懐旧の情を催すのである。

名庭園にこと欠かない古都のなかでもとりわけ遣り水といえは東山の麓を彩る林泉の数々が想い起こされる。

南禅寺のあたり一帯には東山を借景しながら琵琶湖疏水の水を引いた権門貴顕のお屋敷がその数奇を競ったのであった。山県有朋の無鄰庵、野村碧雲荘、対龍山荘、どれをとっても小川治兵衛が精魂こめた遣り水庭園の傑作ぞりいである。

日本庭園の歴史は古い様式を棄てずにその上へ次々と新しい景色を積み重ねるように発展してきた、と言はれる。

平安時代、大和絵風の野筋の庭を活おしていた遣り水はそのようにして現代まで生き残った。まさしくそれは日本人にとって理想の河川像である。

遣り水への愛着はさしづめ自然への祈りでさえあった。

明治大正期までは、その遣り水文化はたしかに生きていたのである。

水位変動の激しい本川から切り離された穏やかな派川を芸術化するというやり方、これを野獣と家畜に区別する考えにたとえてもよいし、あるいは野性 (wild nature) から手飼いの自然 (domestic nature) を峻別する方法、と抽象化してもよい。この二つを混同しないようにするという思想は、人間が自然との長い葛藤劇の末にたどり着いた貴い知恵なのだ。言われてみればあたりまえのようであり、よく考えればなかなか懐の深い自然観がそこにあるように思える。

遣り水とはまさしく河川における手飼いの自然である。水と睦みあって暮らしたい。だが野性の川はおそろしいものだ。荒ぶる水の神を鎮めながら川の美と恵みを人間のものとするにはどうしたらよいのだろう。その答えが遣り水なのではないだろうか。

つまり日本には昔からアメニティ専用の疏水という考え方があったように思うのである。

私は二十年ほど前から川のアメニティ化についてあれこれ考え、いくつかのプロジェクトにも携わってきた。

なかでも広島県の太田川の親水護岸の設計は思いでの深い仕事であったが、太田川のランドスケープ デザインを可能にした最大の条件は他でもない戦前から戦後へかけて開削された太田川放水路ではなかったかと思う。放水路のおかげで、市内派川の負う高水は少なくなり、いささか古風な旧太田川はそのまゝ、少しばかり遣り水化したのである。もちろんそれは文字どおりの遣り水ではない。いまでも洪水流量の相当部分は負担しているし、高潮の心配もあるのだから。

太田川は日本の都市河川としては、めずらしく、堀込型の河道を有しそれゆえ周りの市街地との融合性がすぐれているのだが、それでもやはり河川敷と市街地との一体化を全うしているとは言えないだろう。ふだんはともかく、川

がその野性を秘めている以上、理想のアメニティ化はなかなかむづかしいのである。

放水路やダムによる流量の安定化は遣り水化への第一歩であるにせよそれだけでは無理がある。

まず、洪水の流下を受け持つような川は、スケールが大きすぎる。そこで、人間の尺度に合うようにちまちまといじくると、今度はスケール感がちぐはぐでそらぞらしくなる。大きな川はデザインが控えめにしてあっさりとした上げることが美しい。

それにまたこういう大きな川ではまわりの家々を川により添わせるという風流な手法はとても危険でとれない。要するに大きな川に防災から庭園型アメニティのすべてを押しつけるのは無理があるだろう。

また逆に、最近かなり普及してきた多自然型の工法などは野性をむき出しのまま、庭園型の遣り水に混用するのはいかなるものかという気もする。

やはり、野性味のある本川から水かさの影響をあまり受けない風流な疏水を分流し、二つの性格をはっきりと分けるに越したことはない。もちろんこの二つの間にいくつかの中間段階を設定するのもよいであろう。

こういうアメニティ疏水の例は未だあまり例は多くないと思うけれども、たとえば先ごろ、太田川の基町付近で本川から分けた細い流れを広島城の濠へ落とし、その汚染を希釈しながら再び別の新設水路により太田川へ還流するプロジェクトが実行された。内水の水質浄化とランドスケープを兼ねた興味のある事例である。

中央公園の広々とした緑のなかをゆったり流れているこの派川は、たしかに遣り水の風格を備えている。

このささやかな、しかし、大きな効果を上げた事例は、遣り水文化再生への希望を私たちに与えてくれたように思う。

遠い祖先から連綿と続いてきた遣り水文化の伝統をアメニティ疏水の名において換骨奪胎し、二十一世紀の日本に再び織り込んでみてはどうだろう。

それは文化と野性との間のとり方について、理に合った段階的秩序を築き直す新しいもくろみの一環を成すであろう。